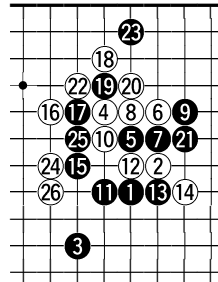


彗星ガイド (4)

九段 河村典彦

今回は、白4に対する黒5の最後の变化を調べていこう。

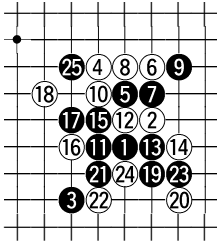
第26図



16のトビ四であつたということになる。白18のトビ三から攻め、白24と飛び出されては黒負けになってしまう。

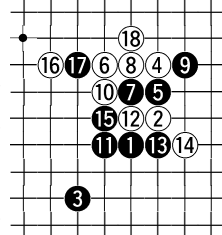
【第27図】黒15と打つておくのが肝心の一手。これには白も16と根元を止めるのが有力。交換に黒17と押さえておくのが連珠らしい展開となる。白は18と上からかぶせてくるが、黒19から21と黒は攻めながら防ぐ構想となる。

第27図



黒23で攻めていく手があればいいのだが、なかなか難しそうだ。結局、黒23から25と、止めておくしかなく、これなら混戦形だろう。もともとの初期値が悪く、黒はこのぐらいの展開は覚悟しなければならない。

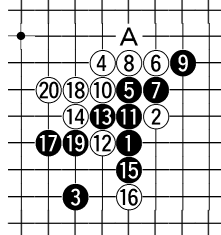
第28図



【第28図】前図が白黒ともに最善と思つていたら、タラニコフの本に白16、18という図が出ていた。調べてみるとこれで白が必勝のようである。白上辺の密集には黒は防ぎがなく、と言つて黒からの攻めもない。うまくけん制する手もなさそうである。さすがはタラニコフ、研究量が違う、と感心した次第である。こうなると、この黒5の手はもう

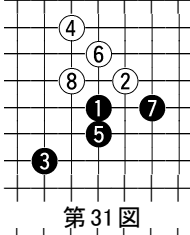
【第29図】また、黒11で次図のように引いていくのも白勝ちになってしまう。白14と引けては黒が苦しくなる。黒17の止めに白18とミセるのが、よくある手筋。黒19を焦点なら白Aと引いてよい。黒19にも白20が含ま手となつており、あとは一手一手だ。

第29図

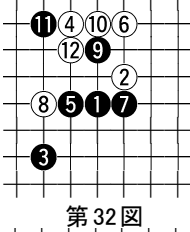


【第30図】32図では、ここからは、黒の異着をどどくんとご紹介

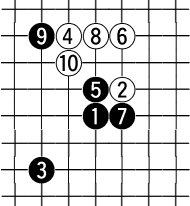
第30図



第31図

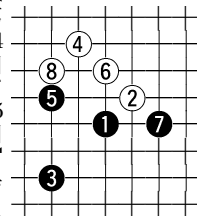


第32図



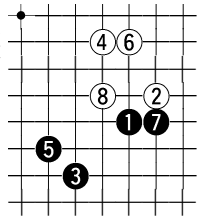
しよう。黒の異着を咎められなければ、白としては打てない。それを知っておくのがこの作戦をかける前提となる。30図も31図も黒1から黒石がぶら下がる形だが、白の打ち方が若干違う。これは、黒3の石とのつながり方が違うからだ。31図と32図は白6と打って良い。大抵異着を咎めるには、まずはこの白6から考えればよい。

第33図



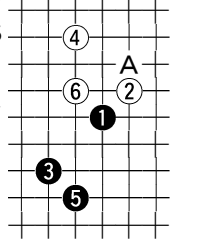
【第33図】次の黒5は少々考える必要がある。もともとこの5は好点なので、打てる可能性があるからだ。ただし、この場合は白6から8で黒困っている。黒5が白4に近づきすぎているのが原因だろう。これで白のスピードに黒はついていけない。防ぐに防げなくなっているのを確認してもらいたい。

第34図



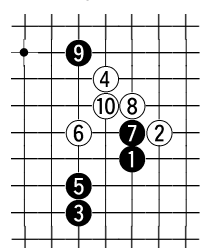
形を推奨しておく。なお、第35図の黒5でAも、同様に白6と打つて良い。

第35図

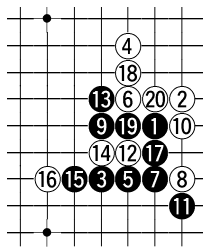


【第36図、37図】今度は黒5の位置が黒3の隣の形を調べてみよう。36図の場合は白6と打つのがいいだろう。これでも呼手になっている。黒7と防いでも、白8から10で黒はもう動けない。また、37図の黒5なら、白6と打っておく。ここで、黒7と引いてか

第36図

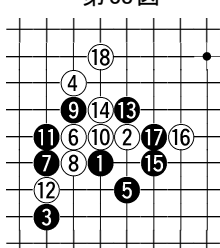


第37図



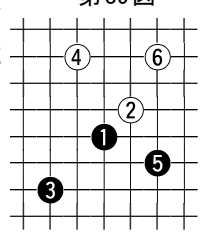
【第38図】黒5の変化。この黒5は打てないがそれを証明するには時間がかかる。白6は当然の一手。ここで悪い理屈はない。黒7もこうけん制したい所で、防ぎ一方では白に自由に打たれてしまう。しかし、白8からはよくある手筋で、白18まで三々禁を狙って白必勝になる。黒7を11なら白9、14、7と引いていく。

第38図



【第39図】最後に、黒の5変化をやっておこう。この手には白6と打つ手がある。こんなのを実験で読んでいくのは至難の業なので、研究で調べておくしかない。もちろん、わからなければ混戦には持ち込めると思うが、こういうので逆転されると非常に悔しい。急所を知っているだけでも違うので、感覚だけでも挿入で

第39図



【第39図】最後に、黒の5変化をやっておこう。この手には白6と打つ手がある。こんなのを実験で読んでいくのは至難の業なので、研究で調べておくしかない。もちろん、わからなければ混戦には持ち込めると思うが、こういうので逆転されると非常に悔しい。急所を知っているだけでも違うので、感覚だけでも挿入で

ら黒9と打つておくのが粘りのある手だが、白10から攻めていき、白18、20の